



東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター

The Newsletter CNEAS

第 33 号

● 目 次 ●

巻頭言：新時代に求められる知の体系化と東北アジア研究センター	1
センターの新組織について	2
共同研究「東北アジア世界の形成と地域構造」主催公開シンポジウム	3
2006年度東北アジア研究センター研究発表会	4
最近のセンター出版物	4-5
客員教授紹介	6-7
新任教員紹介	7
センター動向	7
活動風景	8

巻頭言



新時代に求められる 知の体系化と 東北アジア研究センター

東北アジア研究センター長 瀬川 昌久



このほど、東北アジア研究センター長を担当することとなりました瀬川昌久です。なにとぞよろしくお願いいたします。我々のセンターは、昨年設立10周年を迎えましたが、振り返ってみれば10年前にはほとんど無名の存在で、よく京大の「東南アジア研究センター」に間違えられたものでした。それが、近年では学会その他の集会で余所に出向いても、我々のセンターの知名度が急激に高まっていることを実感いたします。これは単に設立後の年数が長くなったというだけにとどまらず、これまで本センターが率先して試みてきた新たな地域研究確立への挑戦が、正当な評価を得つつあることの証かと思われます。

そもそも地域研究自体、非常に雑多な研究の視座や方法論の集合体であり、決して一つの確立したディシプリンとは言えません。それだけに、地域研究の向かうべき方向性については、地域研究を標榜する同業者の間でさえ、一致をみるのがな

かなか難しい現状があります。従来の文系のみをベースとした、ややもすれば対象の固有性を理解することで自己完結してしまう傾向の強い地域研究に対し、本センターがいち早く打ち出したのが、理工系の諸分野をも含む学際性の強い地域研究の手法でありました。

中国やロシアの発展にともない、東北アジアにおける日本の地位や、日本と周辺諸国との関係のあり方にも変化が生じつつありますが、日本が学術の分野において同地域内でのリーダーシップを確保してゆくためには、個別の分野における研究水準を先端的なものとして維持する努力は当然のことながら、さらにそれらを偏りのない視座で総合し、東北アジア全体の人々の共生と繁栄に資する知の体系として組み立ててゆくことが必要です。そしてそれこそが、本センターの追求しているものだとは私は確信しています。今後とも本センターのこの取組を御支援いただければ幸いです。

センターの新組織について

東北アジア研究センター長 瀬川昌久

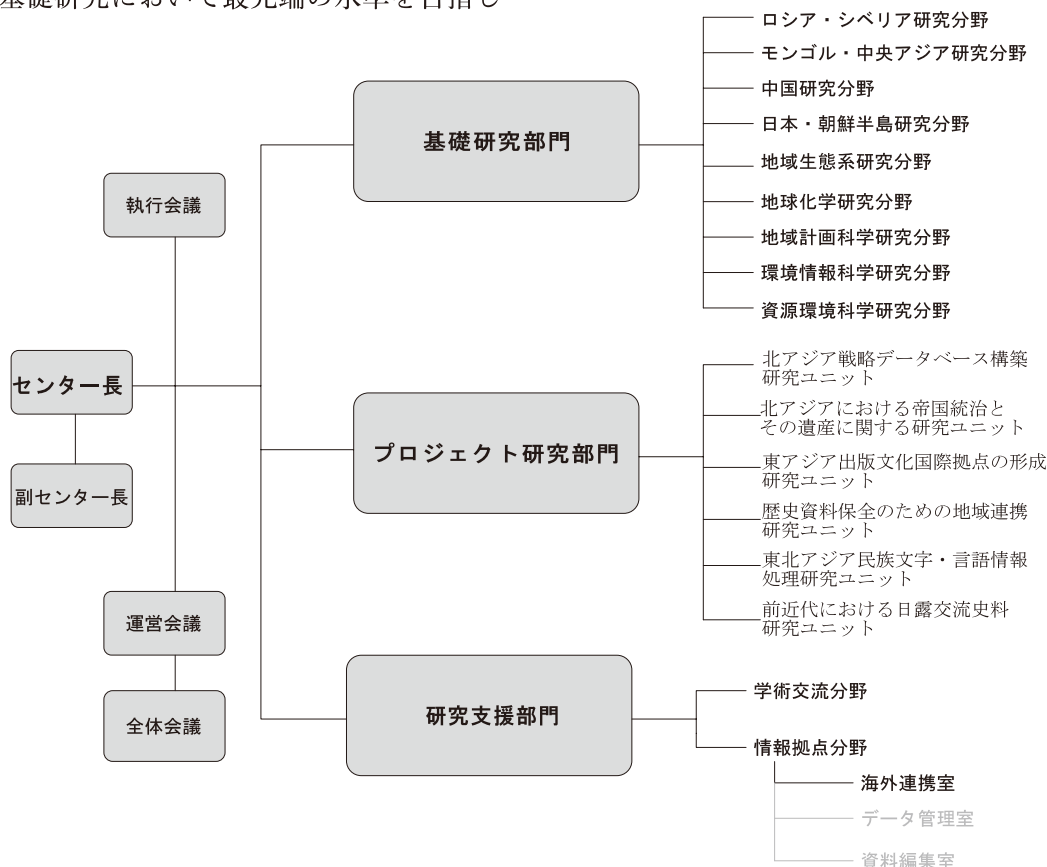
本センターは昨年5月で創立以来満10年を経過しました。この間に、センターを取り巻く内外の状況も大きく変化しております。制度的には、国立大学の法人化にともない、センターの研究活動が依って立つ基盤も、外部からのいわゆる「競争的資金」に依存するところが次第に大きくなってあります。また、これと連動してセンターの活動性やその成果・社会的寄与などを、外部によりわかりやすい形で示してゆくことが必要となっています。そこで本センターは、この4月から大幅にその内部組織を改編し、こうした状況変化に即応できる体制をつくりました。

組織改革では、まず従来の5部門（基幹3部門、客員2部門）を3部門に再編しました。「基礎研究部門」は基本的に専任の教員から構成され、その専門性によって9つの分野に分かれています。文系はロシア・シベリア、中国など対象地域ごとに、また理工系は地域生態系、資源環境科学など基本ディシプリンごとに分野を構成し、それぞれの基礎研究において最先端の水準を目指します。

「プロジェクト研究部門」は上記の「基礎研究部門」の専任教員からのいわば志願により構成されますが、その中の個々の「プロジェクト研究ユニット」は、これらの専任教員が中心となり、学内外の関連研究者をも糾合する形で、特定の研究テーマについて時限的に組織するものです。経費は外部から競争的資金を獲得することが原則ですが、センターとしてはその申請のための経費や助走経費、さらに研究スペースや補助人員などの支援を行い、斬新で独創的なプロジェクト研究の実現のために便宜をはかっています。

「研究支援部門」は、国内外からの客員教授で構成される「学術交流分野」と、海外連携などを担当する「情報拠点分野」からなり、センターの国際的学術交流や、情報発信等を促進します。

こうした新組織により、本センターは新たなスタートを切るとともに、研究活動のより一層の効率化と活発化を目指して努力しております。



共同研究 「東北アジア世界の形成と地域構造」 主催公開シンポジウム

(東北大学東北アジア研究センター設立10周年記念シンポジウム・地域研究コンソーシアム連携シンポジウム)
内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」―モンゴルと華南の視座から

2002年度から5年間に渡って研究を継続してきた共同研究の最終年度の締めくくりとして、東北アジアにおいて大きな位置を占める中国、特にその民族問題に焦点をおいたシンポジウムを開催した。中国政府が政策的に強力に「中華民族」形成を推進しつつあることが「少数民族」の自己認識の中にも大きな変化を引き起こしつつあり、その様相を南北の華南とモンゴルにみて「民族問題」理解の深化をめざしたものである。2007年3月10日に本センター大会議室を会場として開催され、70名近い参加者があった。

華南セッションは、上野稔弘（本センター）の司会と瀬川昌久（本センター）の趣旨説明の後、「雲南タイ族の事例―中華世界における「宗教」と『民族』」（長谷川清・文教大学）、「貴州ミャオ族の事例―清末から現在に至る学校教育から見えてくるもの」（曾士才・法政大学）、「海南島リー族の事例―清末から現在に至るリー族と漢族諸集団の相互関係」（瀬川昌久）の3報告がなされ、三尾裕子（東京外国語大学）がコメントした。その後のモンゴル・セッションは、栗林均（本センター）の司会と岡洋樹（本センター）の趣旨説明の後、「清代モンゴル東部辺縁地域における「民族」の接触と変容」（柳澤明・早稲田大学）、「中

華民国期における熱河省の土地政策について」（広川佐保・新潟大学）、「ハラチン・トメド＝モンゴル人と近現代モンゴル社会―地域エリートの選択」（ボルジギン・ブレンサイン・滋賀県立大学）の3報告と岡洋樹のコメントがなされた。最後に岡洋樹の司会で総合討論に入り、南北比較の視点で意見交換が行われ、多くの問題点が指摘され議論された。このシンポジウムによって、漢化と「中華民族」化の南北における具体相を理解できる「場」が提供され、参加者の視野拡大と理解深化をもたらし、かつ東北アジアの民族問題を比較的に検討していく視座も得られ、学術的価値の高い成果をあげた。

このシンポジウムは地域研究コンソーシアムと連携した。また、初めての試みとして全国の大学院生やポスドクの次世代地域研究者を対象として旅費支援を行った。応募者の中から選んだ10名の参加者も積極的に発言するなど、研究交流を深めていた。このように、若手地域研究者のために研究交流と刺激となる場を提供したことは、本センターの地域研究機関として果たすべき役割の面でも一定の成果を収めたといえよう。

(山田勝芳)



開会の挨拶をする平川センター長



会場の様子



最近のセンター研究会・講演会



2006年度東北アジア研究センター研究発表会

2007年3月29日（木）13:00～18:20、東北アジア研究センター4階大会議室において開催された。次の14のセンター共同研究と2つの個別研究について報告が行われ、報告終了後には30分ほどの全体討論ももたれた。研究課題名と研究代表者は以下の通りである。

- ・東北アジア世界の形成と地域構造（山田勝芳）
- ・前近代における日露交流資料の研究（平川 新）
- ・過去5000年間ににおける白頭山の噴火活動と周辺地域への歴史的影響（谷口宏充）
- ・西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究（菊地永祐）
- ・シベリア地域研究文献データベースの構築とロシア地方部におけるシベリア地域研究動向にかかわる調査（高倉浩樹）
- ・東アジア出版文化の総合研究（磯部 彰）
- ・モンゴル語文献資料の電子化利用に関する研究（栗林 均）
- ・近未来の宮城県沖地震に備えた歴史資料保存のための調査研究事業（平川 新）
- ・東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究（工藤純一）
- ・東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究（岡 洋樹）
- ・東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方（山田勝芳）
- ・中国の民族理論とその政策的実践の文化人類学的検証 ―中華民族多元一体構造論を中心に―（瀬川昌久）
- ・旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究（高倉浩樹）
- ・数理地理モデルによる東北アジア地域の土地利用形態の比較分析（奥村 誠）
- ・火山探査移動観測ステーションMOVE開発の現状と課題 ―特に伊豆大島三原山における運用試験―（谷口宏充）
- ・地球観測衛星ALOS「だいち」による東北アジア環境計測の展開（佐藤源之）

（鹿野秀一）



・・・最近のセンター出版物・・・

◆山田勝芳・工藤純一編「ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究」東北アジア研究センター叢書第22号、230ページ、2006年10月

東北アジア研究センター共同研究は、アメリカの気象衛星ノアのデータを東北アジア全域にわたって本センターに集約し、総合的な研究を進めるために、2000年（平成12年）度から2005年（平成17）年度まで、継続して研究を進めてきたものである。本書は、この研究の中から主として査読付論文、査読付国際会議報告書など42編を収録したものである。特に、極東ロシアの森林火災、モンゴルの雪害、シベリアチャニー湖の環境解析などの研究成果は本センター独自の基礎研究であり、既に内外から引用されているだけでなく基礎データとしての価値も高い。

（工藤純一）

◆磯部彰編「慶應義塾図書館所蔵関斎堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料（下）」東北アジア研究センター叢書、第23号、626ページ、2006年12月

明代出版された西遊記はいくつかあるが、世界に唯一セットのみ残る福建省の閩斎堂という本屋が出した西遊記の原寸複製とその研究（中国語表記）から成る。今回、昨年度の上巻（巻1～11）に続いて、下巻は巻12～20までを収める。世界の研究者が眼にしたことのない善本の一種で、現在は慶應義塾図書館の所蔵である。上図下文形式の小説の明刊本では最晩期に当たり、建陽書林地区での商業出版の盛衰を窺うことが出来る資料である。センター内共同研究「東アジア出版文化の総合研究」による成果の一つで、東アジア善本叢刊第6集になる。（磯部 彰）

◆N. Tsyrempilov, T. Vanchikova(ed.), *ANOTATED CATALOGUE of the collection of Mongolian manuscripts and xylographs M2 of the Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences*, CNEAS Monograph Series No. 24, pp. 412, 2006

ロシア科学アカデミー、シベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所以ロシア連邦ブリヤート共和国の首都ウラン・ウデにあり、ロシアでも有数のモンゴル学研究の中心的な機関である。本書は、同研究所に所蔵されているモンゴル語写本・版本の「M2」コレクション（全852点）の解説付き分類目録である。写本・版本のタイトルはモンゴル文語のローマ字転写で、解説は英語で書かれている。2004年に公刊された東北アジア研究叢書第17号は、同研究所の「M1」コレクションであり、本書はその続編にあたる。巻末にモンゴル語タイトル索引、人名索引、52点の蔵書印の写真、および210点の図版写真（いずれも白黒）等が付されている。編者のツェレンピーロフ氏は、かつて本研究センターの客員研究員、監修者のワンチコワ氏も客員教授として滞在したことがある。本書はセンターの共同研究「モンゴル語文献資料の電子化利用」（代表者：栗林均）の研究成果のひとつとして公刊された。（栗林 均）

◆瀬川昌久編「海南島の地方文化に関する文化人類学的研究」東北アジア研究センター叢書第25号、158ページ、2007年3月

本著は、平成14～16年度科学研究補助金（基盤B）ならびに本センター共同研究として行われた国際的共同研究の成果で、瀬川の他に国立民族学博物館の塚田誠之教授、広東省民族研究所の馬建釗所長、フランス高等社会科学研究院研究員の Jöel Thoraval 氏が執筆している。海南島西部の儋州・臨高地区で上記の3人が実施した現地調査に基づき、同地区の多様な民族集団ならびに地方文化それぞれの特色と、その相互関係について明らかにしたもの。同地域は、日本の栃木県ほどの広さの地域の中に5種類の漢語方言と少なくとも2種類の少数民族系言語が話されるという点で、中国の中でも地方文化の分布が最も複雑な地域の一つである。そうした状況が形成されるに至った歴史的背景や、相互の境界のあり方等の分析は、エスニシティ研究にとって極めてユニークで貴重な事例研究としての意義を有する。（瀬川昌久）

◆岡洋樹、オーホノイ・バトサイハン編「1911年モンゴル民族革命の前提条件と国際情勢」Northeast Asian Study Series 9、179ページ、2006年（モンゴル文）

本書は、2005年12月21日にモンゴル国ウラーンバートル市内のモンゴル日本センターで開催された本センターとモンゴル科学アカデミー国際研究所共催シンポジウムの報告論文集である。以下の11件の論文と、当日の総合討論が収録されている。岡洋樹「清代のザサグ旗とモンゴル独立の社会的条件」、O.バトサイハン「ロシア人の目からみた19世紀末のモンゴルの状況」、中村篤志「乾隆48年の論旨とモンゴルの『社会変容』」、佐藤憲行「イヘ・フレーのダムノールチン地区について」、T.トゥムルフレグ「1911年モンゴル民族革命に影響した外的要因」、橘誠「モンゴル独立と万国公法」、B.バヤルサイハン「ボグド・ハーン制モンゴル国の法制度における満洲法制文化・観念の継承」、L.アルタンザヤ「サイド・ノモン・ハン・ノヨン・ホトクトのシャビ旗について」、田淵陽子「フルンブイル・新バルガ左旗最後の総管エルヘムバトの一写本について」、D.シュルファー「20世紀初めにおける統一モンゴル国建設の可能性と隣国の立場（タグナ・トゥバを例として）」、S.ツォルモン「ホトゴイド・アルタン・ハーンに関するロシア文書史料」。（岡 洋樹）

客員教授紹介

チョローン・ダシダワー



チョローン・ダシダワー教授は、1949年モンゴル国ウランバートル市生まれ。1967年に中等教育卒業後、1967～1971年モンゴル国立大学で歴史学・歴史教育を専攻した。1984年、モスクワのロシア科学アカデミー東洋学研究所

で歴史学博士（Ph.D.）を取得、2002年にウランバートル市で歴史学博士（Sc.D.）号を取得した。教授称号を有する。

1971～1986年、モンゴル科学アカデミー歴史研究所研究員、1987～1992年に同国社会科学研究所研究員、歴史学部門主任、1993～1996年、モンゴル国政府文書管理局長、1998～2002年、文化芸術大学文化芸術マネジメント学部長、2003年から科学アカデミー歴史研究所長の任にある。

教授は、モンゴルの文化史・政治史を専門とし、著書7冊と100本余の学術論文、20冊余の共著書がある。著作のいくつかは、ロシア語・英語・日本語に翻訳されている。教授が2003年に刊行したモノグラフ『赤い歴史 コミンテルンとモンゴル』は、2004年度モンゴル国学術優秀作品に選ばれている。

東北アジア研究センターは、東北大学とモンゴル国立科学アカデミーとの大学間学術交流協定の世話部局であるが、ダシダワー教授率いるアカデミー歴史研究所とは、2003年にシンポジウムを共催するなど、研究交流を進めている。また東北アジア研究センターは協定締結以来歴史・言語を専攻する短期留学生6名を研究生として受入れており、現在この内5名が歴史研究所などアカデミー傘下の機関で研究者・教員として勤務している。

（岡洋樹）

コンドラショフ・L・グリゴリエビッチ



コンドラショフ先生は現在ハバロフスク州立自然環境管理訓練研究所所長、ならびに、NGO太平洋森林会議代表として、ロシア極東地域の森林火災の研究分野では主導的な立場にある。1950年2月にハバロフスク市にお生まれにな

ったコンドラショフ先生は、1973年ハバロフスク国立教育大学卒業、1980年から1983年にかけて大学院生としてロシア科学アカデミー極東支部経済学研究所に進学された。1998年にロシア科学アカデミーモスクワ東洋学研究所で経済学博士候補を取得され、1998年9月から2001年にかけて大学院生として、農業アカデミーウスリースク森林研究所に進学され森林工学を修了した。この間、1991年から2001年までは、ロシア天然資源省極東森林研究所副所長

として極東地域の森林火災の研究を専門に行っている。

また、学術活動としては、1995年から2001年にかけてIGBP北ユーラシア極東横断研究コーディネーター、2001年ソウル大学農学生命科学客員研究員、2004年から2005年にかけてFAO森林管理及び東北アジア森林火災コンサルタント、2004年から現在までは国連災害軽減国際戦略会議林野火災と世界火災ネットワーク委員として活躍している。さらに、日本へも研究で何度か来日しており、2000年9月と2001年2月の2回にわたり北海道大学大学院農学研究科外国人研究者賞を受賞している。

今回の客員教授としての招聘では、極東地域の森林火災の解析と日本への影響をテーマに研究活動にいそしむ毎日を送られている。

（工藤純一）

ソドノム・ツォルモン



ソドノム・ツォルモン教授は、1953年にウランバートル市で生まれました。中等教育卒業後、1971～1976年モンゴル国立大学言語学部言語文学科に学び、モンゴル史料研究をテーマとした。1976年に同大を卒業後、モンゴル科学アカデミー歴史研究所中世史研究室に入り、現在同研究所シニア・サイエンティストとして勤務している。1993年に学位論文「ガルダン・ボショグト・ハーン 社会政治活動（1644～1697年）」で歴史学博士（Ph.D.）を取得し、1998年に助教授、2003年に教授称号を授与された。1995年にはドイツ・ボン大学に招聘されている。一方1995年からモンゴル科学アカデミー附属ウランバートル大学アジア研究部歴

史科主任、1998年から社会科学部長、2005年から学術・渉外担当副学長を兼務している。

研究テーマはモンゴル中世史で、モンゴル帝国、清代の社会・政治史を研究している。著書として『ガルダン・ボショグト・ハーン』など4冊のほか、中等教育用教科書、史料刊行、テレビ・ドキュメンタリー映画2本、学術論文60本などがある。『モンゴル国史』5巻本など、共著も多い。著作のいくつかはロシア連邦・中国・日本・ポーランド・韓国の学術雑誌にも掲載されている。2006年に歴史研究所から発表した『モンゴルの黄金のオルド』は、モンゴル帝国史に関する同研究所の他の4冊の著作とともに優秀著作に選ばれ、金賞を獲得している。

（岡洋樹）

新任教員紹介

資源環境科学研究分野・助教

渡辺 学

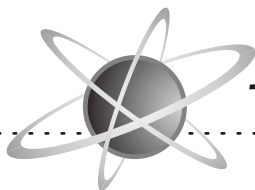


この4月より、東北アジア研究センター佐藤研究室の助教になりました、渡辺学です。大学院の頃までは、X線天文学の研究をしていました。銀河団（銀河が数十～数千集まってできた天体）に付随した、高温（～数十億度）で希薄

（10-3個/cc）なプラズマガスから放射されるX線の温度分布を調べることで、銀河団の進化の解明を目指していました。その後、宇宙航空研究開発機構の解析研究グループに移った後は、地球観測衛星「だいち」の、観測要求に関連した衛星運用の仕事をしつつ、合成開口レーダを用いた森林の研究を行いま

した。他の研究者にも協力して頂き、北海道苫小牧にある約12,000本の樹木の樹高と太さを測定し、森林の量とレーダの後方散乱強度の相関の、樹種やスタンドの特徴の依存性について調べました。

趣味は、アウトドアと料理と旅行です。これまで東京に住んでいたため、あまりアウトドアが楽しめなかったのですが、仙台ではたくさん遊べる場所がありそうなので、フライフィッシング、海釣り、登山、シーカヤック等ができる事を楽しみにしています。もちろん、遊びだけでなく仕事の方でも、頑張って成果を上げて行きたいと考えていますので、今後とも、よろしくお願いします。



センター動向

〈客員教授〉

- Kondrashov Leonid Grigorievich（コンドラショフ レオニード グリゴリエビッチ） ロシア連邦、ハバロフスク州立自然環境管理訓練研究所 所長、「ロシア極東地域森林火災の日本に及ぼす影響に関する研究」 平成19年3月13日～平成19年6月30日
- Sodnom Tsolmon（ソドノム ツォルモン） モンゴル、モンゴル科学アカデミー歴史研究所シニア・

サイエンティスト、「清代モンゴルにおける貢租賦役に関わる法制度に関する研究」 平成19年3月16日～平成19年6月30日

〈助教授〉

- 北風 嵐 助教授 平成19年3月31日限り定年退職
- 〈助教〉
- 渡辺 学 助教 平成19年4月1日付け新規採用（任期：平成22年3月31日まで）



モスクワにおける史料収集

(東北アジア研究センター・准教授)

寺山 恭輔

歴史研究者が学術的な活動の成果として論文を書く際には、対象とするテーマの主たる舞台に足を運んで地理的状况を観察したり、扱う時代が現代に近ければ関係者にインタビューすることも考えられるが、通常は二次史料である研究文献や一次史料（新聞記事や公文書、当事者の回想録）を読み込みこんで形にしている。史料が書籍、雑誌やマイクロフィルムの形で刊行されていれば大学の研究室で読めるが、刊行されていない膨大な文献はそれが保管されている文書館に足を運んで読む必要がある。本ニュースレター25号でもロシアにおける文書館のあり方についてお伝えしたとおりである。今回歴史研究者の活動現場として取り上げるのは、2006年9月に一ヶ月間史料収集したモスクワの文書館である。写真はおそらくロシアでも最大規模のこの文書館の入り口を中心に写したものである。敷地内にはロシア革命以後の政府、経済、それに近世関連の文書を保管する独立した三つの古文書館が存在しており、とにかく巨大な建物群である。主として政府関連の文書を閲覧すべく、筆者がここ10年以上にわたって毎年のように利用している文書館の一つである。

重要施設にはいたるところに民警が配置されているのがロシアの特徴だが、この文書館は特別な地位を占めているらしく、入り口で入館者ににらみをきかせている警官は常に自動小銃を抱えている。実際、中庭に面したところに警察の詰め所があり、交替制で警備に当たっている。入館手続きを終えて2階に上がると50席以上の広い閲覧室がある。閲覧室を撮影するには許可がいるらしく、今回は申請しなかったので内部の熱気を伝えられず残念だが、ロシアばかりでなく、欧米や日本その他のアジア系の研究者も熱心に史料を読んでいた。

今回は初めて文書館に付設されていた宿泊施設を利用した。入り口からすぐの左手にあり全部で10室程度、地方から史料を読みにくる研究者にとっては高騰する一方のモスクワのホテルに比べて割安の環境を提供している。ただし、ほとんどが相部屋でトイレ、シャワーは共同、食堂もなく、門限は12時だが、調理場と料理道具はそろっており自炊は可能である。開館

時間は曜日によって異なり、閉館時には他の文書館や図書館で史料を収集することになる。したがって日によってはメトロで2-3箇所を渡り歩くこともある。

史料を読み始めると日本では読めないものだけに、できるだけ多くの史料を持ち帰ろうと昼食もそこそこになってしまう。歴史研究者の性なのだろうか。私の場合は部屋に戻って少し腹ごしらえしてまた読み続けたが、定年退職されてからもモスクワまで出かけてきて、食事抜きで史料を閲覧しておられた旧知の先生には頭が下がる思いがした。まだ誰も利用していない面白そうな文書に出会うときの知的興奮は、二次史料からはなかなか得られるものではない。文書館通いが続きそうである。



文書館の入り口（入り口の2階が閲覧室、入り口の左側に宿泊施設の窓。右奥、茶色の高層の建物に大量の文書が保管されている）



文書館の裏側

編集 後記

2005年からセンターを率いてこられた平川新教授に変わり、4月から瀬川昌久教授がセンター長に就任されました。また、センターの組織も改編され、新しい体制が動き始めました。本号では、新しい状況についてお伝えします。

(鹿野秀一)

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第33号 2007年5月15日発行
発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター

PHONE/FAX 022-795-6010

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>